

中野目徹著『政教社の研究』(思文閣出版・一九九三年)

渡 辺 和 靖

方法について 中野目氏は、従来の思想史研究の方法を批判しつつ、

みずからの方法についてつぎのように述べている。「一般に思想史というからには、権力構造や経済的基盤からも相対的に自由な思想それ自体による自律的な展開の可能性を認める立場を共有している。しかしながら、我が国の近代思想史に関するかぎり、例えば朱

子学的な思维様式を規範意識と捉えて内在的な論理構造を分析していくような方法だけに拠っては、極めて限定的な頂点思想家しか研究対象にできないことになってしまう。一方、民衆思想史の成果も、「民衆」の歴史的役割を強調しようとする「問題意識」が先行して、そこで明らかにされた個別性、多様性と時代思潮との関連を説明する方法論的自覚には乏しいように思われる。／政教社が言論の対象とした「時務時事」は、『日本人』創刊の趣旨としても予告されていたように、「宗教、教育、美術、政治、生産」の各方面に及んでいた。したがって、それらさまざまな分野において行われた実践活動と思想内容の相互連関のあり方から、時代状況の中における政教社の思想的境位というものを解明していく」。ここには、個人の思

想的営為と、個人をひとつの集団へと結びつけるシステムとの相互関係をとおして、思想と時代のダイナミックな連関性を解明しようとする新しい問題意識がうかがわれる。このような方法は、後の考察のうちにじゅうぶん生かされ成果をあげている。

さて、中野目氏は、政教社にかんする先行研究について、次のように叙述している。「政教社が基礎とした階層との連携及び「国粹主義」による新しい「国民」像の提示を重視するものの、それらが「天皇制国家」の諸側面、例えばその国体観や侵略主義との親和性を明らかにしていくことをもって思想的脆弱性を突くという、ほぼ共通のバタンの中になされてきた。そこで示されてきた政教社像は、藩閥政治との対立という思想の機能的側面だけで評価されるといふ、きわめて枠組み指向が強い中で観念論的にくり返されてきたものであった。」

また、別の箇所でも、さらに具体的に「政教社に言及した先行研究の成果が「健康なナショナリズム」とその「限界」という思想像の提示をくり返す地点にとどまっているのは、主として三宅と志賀

の代表的著作ばかりを取り上げてきた方法論上の制約に基づいていると思われる」と述べられている。中野目氏が指摘するように、こうした見解はいわば通説として広く一般に流布しているように見える。

「国粹主義」の評価について 以上のような方法論に立つて中野目氏が到達した具体的な「国粹主義」評価についてはつぎのように記されている。「要するに「国粹」とは「西洋の開化」を日本に「輸入」する際の一種のフィルターであり、それを通過させることによつてはじめて「日本の開化」に「同化」するという主張である。以上から志賀の「国粹」＝「日本の開化」の価値基準という側面が確かに指摘できるのである。」

このように「国粹主義」の思想を規定することによつて、さらに、それが同時代のさまざまな思想の営みと連動していることが明らかになると中野目氏はいう。「志賀をはじめとする政教社の「同志」たちだけでなく、明治二十年代にそれぞれの立場から文明論の構築を模索した蘇峰たち民友社や内村鑑三たちクリスチャンに共通しているのは、このような思想的系譜に連なるということであつた。」

ここに提起された「国粹主義」の位置づけは、独自の思想的方方法によつて到達した新たな「境位」であり、従来、政治思想的考察によつて先行されていた通説を大きく修正するものである。とりわけ、それは、明治二〇年代後半から二〇年代にかけての思想の潮流にたいする広い視座を提供するという点において高く評価されるべきであろう。

つづいて、中野目氏は、「国粹主義」のいわゆる変質について、「国

粹」の意味内容がそれ以上に豊富化、具体化される契機に乏しく、「美術的の觀念」に置き換える余地を残すことによつて、文明論の中軸をなしながら一種の中空構造を示すことになる可能性もあながち否定できない。」と指摘したうえで、菊池熊太郎、棚橋一郎など周辺の思想家、さらには読者の投書などを分析することによつて、その思想が政教社という運動体の中でどのように展開していったかを具体的に分析している。菊池は「何を以てか我が日本の国粹となす」と自問し、それに答えて「我が皇室に対する国民の感情即ち是のみ」と断言する。それは「当時としては一種の常套表現に伴つて喚起される感情」であり「絶対的な価値として作用するもの」ではなかつた。しかし、志賀においては漠然と「美術的の觀念」とされ、まだ明快に規定することがためらわれていた「国粹」の内容が、いとも簡単に「皇室保存」と置換されているかの印象を受ける。

これを「悲劇」と論ずることは容易であるが、このような展開には、実際の理由があつた。志賀は「結局それを「美術的の觀念」であるとする曖昧な主張をくり返したのに対し、菊池はそこに具体的な「皇室」を当てはめた。ともかくも、この菊池の論断は一般の理解を早めるという効果があつた。」この時期の「国粹主義」は、「諸々の側面と可能性を含んだ総合的な思想としていまだ形成過程にあつたというべきである。」と中野目氏は論じている。

この評価は、政教社の「国粹主義」が、「書斎の中で構築された精緻な理論体系というよりも、むしろ実社会の中で鍛えられた行動の指針というべきもの」という、中野目氏の独自の視点から導き出されたものである。「国粹主義」を一つのステイタックな体系とし

てとらえる傾向にあった従来の研究に対して、運動体としてのそれを見事に分析したことは、中野目氏の功績である。

政教社の時期区分について 本書の成果の一つとして、政教社の活動を三期に時期区分し、「初期政教社」という概念を提出したことを挙げることができる。『日本人』の廃刊と『亜細亜』の創刊という事実は、政教社の変貌を内外に印象づける画期となったに違いない。(中略)しかしこの場合、△媒体▽に現われた異変はむしろ変貌の表層とみるべきであって、△組織▽の変質と言論内容の推移こそ、その本質とはいえないだろうか。△組織▽の変質は政教社の思想活動に転換を求めることとなつたろうし、言論内容の推移は政教社の結集原理に改変をもたらさずには措かなかつたと思われる。この両者が相まって△媒体▽の変化を促したと考えられ、思想集団としての政教社の変貌はそれら三つの側面が交錯する位相において把握されるべきである。」

このように論じ、中野目氏は、政教社の変質は「大同団結運動からの後退をうけて明治二十三年になると徐々に現われはじめていた」と指摘している。そして、その変貌の具体的内容として、第一に、「今外三郎を主要な論客とする政教社の実業論」が「北海道移住論へと展開していった」こと、第二に、「思想活動の領域を国際問題へと移行させていた」という、二つの「方向転換」をあげている。「植民論が砲艦外交に代表される『力の福音』に傾斜したのをみると、「国粹主義」の展開相という視角から検討してきた変貌期政教社の対外論は、おぼろげながらその輪郭を現わし始めたといえる。それはすでに明らかにしたところによると、「東方問題」を

機に南進論よりも北進論の有効性が確認され、北進の正当性を保障する論理の枠組みとして「東洋盟主論」を提示したとき、「国粹主義」は「亜細亜主義」へと転回を始め、さらに『力の福音』への帰依を示すことで、来るべき日清戦争にもそのまま対応することができるようになった。」

このような変化の中で、常に政教社の中心に位置していた、三宅雪嶺と志賀重昂の二人は、しだいに「差違の相貌を際立たせていったようにみえる」と中野目氏は指摘する。「志賀は運動の中心に立つことで政界にさらに一步近づき、三宅は従来の姿勢を貫くことによって批判の自由を確保した。」

三宅についていえば、「この時期の政教社が主張した積極的な対外論は、三宅にとつても「我観」の視線の延長上において国家的段階から国際的段階への遠心的な方向として容認できるものだったはずである。「国粹主義」における「国粹」もこの視線上に収められるものであった。しかしその場合でも、存在論的に規定された宇宙を起点とする求心的な方向が絶えず反復内省される契機が確保されているならば、国家的な要請に基づく積極的な対外論に対しても、それを無限定に肯定することは周到に避けられたであろう。この結果、あらゆる価値判断に際して同時にそれを留保する要素を忍び込ませる彼一流の「するも可、せざるも可」という表現手段が準備され、必然的に現実政治からはしだいに距離を置く一因ともなったのである。」

また、志賀についていえば、「国粹」とは「日本の開化」の価値基準であるとされ、それを根拠に文明化を推進する思想的立場が「国

粹保存主義」であった。だが、その「国粹」概念の理論化の一つの方向はこの「美術的の観念」とされたまま、いわば保留にされていたのである。ほかならぬこの「美術的の観念」が、『日本風景論』として結実したのであった。しかし逆にいえば、志賀の「国粹主義」は、社会進化論的な発展段階説を前提に新たな文明論として展開する可能性を、いまや全く「日本風景」という「美術的の観念」の中に解消させてしまったともいえるのである。」

かくして二人の関係は、思想においてのみならず、実践活動においても大きな距たりをもつようになる。「志賀は隈板内閣で外務省勅任参事官に就任したのに対し、主として三宅の筆になると思われる『日本人』の誌面には同内閣と憲政党から距離を置く論調が目立ってくる。これと同じ時期、政教社の外に目を転じれば、八月十日に『国民之友』が終刊されたのが注意を惹く。立場こそ違え、反藩閥、民党合同を主唱してきた政教社と民友社、その「国粹主義」と「平民主義」がこの頃に最終的な終末を迎えつつあったとはいえないだろうか。」

このような志賀と三宅の隔絶について、中野目氏は、時代状況によってもたらされたという面とともに、「彼らの抱いた『国粹主義』の構造そのものに由来」する「内在的要因」を指摘している。「志賀の場合、『総併力』をはじめとする進化論の示す思考方法に依拠しつつ、大和民族が国際社会の中で適者として生存していくためには、西欧に同化（欧化）するのではなく自国固有の価値基準（国粹）を発揮することによって一国の独立を維持していくことに主眼が置かれ、そのための方途として『国粹主義』『大同団結』『殖産興業』

が構想された。しかし、現実の日本国家がアジアに向かって膨張していくのを見たとき彼の思考は停止し、「美術的な観念」とされた日本風景の称揚へと結びついていったのである。一方三宅の場合、日本人固有の特徴（国粹）を伸張することが世界人類全体の進歩に貢献すると考え、そのような日本人と世界人類との関係性を哲学的宇宙論と社会有機体説によって把握していた。彼の思考は、「哲学者」と規定された自己に忠実であることによって、あらゆる現実的な事象を相対化しうる立脚地を確保したものの、「国粹」の何たるかに正面から答えることはついになかったのである。」

「書生社会」について 本書においてもっとも注目されるのは、「書生社会」という概念の提起である。中野目氏は、政教社の歴史的位臚づけを解明するために、政教社の「同志」たちが東京大学の「貢進生」であり「文学士または農学士を名乗っている」事実を踏まえて、「書生社会」という独自の歴史的概念を提起している。「ここで想定している書生とは、中等学校以上に在籍するかあるいはそれらに入学するための受験勉強をしている者たちである。彼らは卒業後に、『中人以上ノ業務ニ就ク』か又は『高等ノ学校ニ入ル』ことが期待されるという一面をもっていた。」

政教社のメンバーは、いわばこうした「書生社会の頂点に立っている」のである。「貢進生」の伝統を受け継いだ「書生社会」においては「政治志向が潜在的に卓越していた。『彼らがその後間もなく雑誌『日本人』に拠って、政治評価を軸に、宗教、教育などの諸問題を論じるに至る必然性は、この書生社会の志向性の中に胚胎していたといえる。』国家体制の整備と社会の序列化が急速に進んだ」

明治二〇年前後において、「政教社を設立する」「同志」たちも、学生、生徒としては形成途上にあった「明治国家体制」構想の内側の存在であって、教育行政家や講壇学者として応分の「成功」をする見込みがあったのである。／その彼らが、明治二十一年の初頭までに、公職を擲って雑誌の創刊に踏み切った意味は大きいと思われる。政教社の「同志」となったことは、社会の制度化に対する比較的早い逸脱の一例といえるのではないか。しかし同時に、逸脱によって比較的早く社会——とりわけ書生社会——に知られる端緒を作ったという一面もある。」

このような「書生社会」という背景を設定すると、例えば、政教社と民友社の共通点と相違点がはっきりと見えてくると中野目氏は論じている。蘇峰の「いう『明治ノ青年』」は、彼が当初あらゆる立論で立脚点とした「田舎紳士」の予備軍とでもいうべき、地方の青年層すなわち「田舎書生」のことである。つまり、本書の分析視角とした「書生社会」の構成者という点では、政教社と民友社は共通の基盤に立っていた。「しかし、東京の書生社会は出身地の地域性をふまえながらも、それを否定したところに成り立っていたともいえる。したがって、蘇峰のいう『田舎書生』」には、東京の「学士」は含まれないであろう。（中略）ここに政教社と民友社の相違点が存するという予測を立てることができる。」

また、中野目氏は、当時の「書生社会」の実態に即して、「国粹主義」の成立にかんして興味深い仮説を提出している。三宅が学んだ開成学校で「使用されたテキストは、ウィルソンのリーダーを基本とし、パーレーの万国史やコーネルの地理書など、同時期の慶應

義塾とも共通するもので、日本読書、体操以外はすべて英語を用いる授業だった。」また、志賀が学んだ札幌農学校でも、教科のほとんどは「英語で講義された。」「このような英語漬けの状態も『国粹』への着目を促す一因となっていたと考えられる。」

ここに暗示されたモチーフは本書において必ずしもじゅうぶん展開されていないが、政教社以外の思想家においても検証に値する興味深い論点であり、明治思想の展開を考察する上で一つの新しい視点を提供するものである。

今後の課題 最後に、いくつか、本書を読んで気がついたことについて述べてみたい。

① 「国粹主義」の思想的な位置づけについて

中野目氏が論ずるように「国粹」が「日本の開化」の価値基準であるとして、このような思想が明治思想上においてどのような意味をもつかについて考察するためには、その前段階としての啓蒙思想とりわけ福沢諭吉の文明観について明確に規定しておくことが必要であろう。指摘されている、英語中心の学校教育にたいする彼らの反発のうちに、福沢の文明観への反発が含まれているであろうことはじゅうぶんに予測される。

② 「国粹」の思想と進化論との関係について

志賀及び三宅の思想について、中野目氏は、進化論の影響を指摘している。しかし、明治日本において、進化論は、民権派にも反民権派にも、キリスト教にも仏教にも、また井上哲次郎にも大西祝にも受け入れられたのであり、問題はそれをどのように受け入れたかということである。これを明らかにするためには、参照した原典と

の精密な比較対照などの作業を通して、彼らの進化論理解における独自の構造を析出することが必要になるだろう。

③ 「書生社会」の概念について

「書生社会」という概念を、中野目氏は、東京大学を頂点とする閉鎖されたエリート集団という狭い意味と、それらを取りまき支える幅広い勢力という広い意味の、両様に使用しているように見える。そのため、この概念のもつ豊かな内容をじゅうぶんに生かしきれていないように見える。明治のキリスト教が佐幕派から生まれたという山路愛山の指摘、また北村透谷を中心とする『文学界』の運動をも視野に入れた、「書生社会」の政治体制からの逸脱傾向をより広い視座のもとにとらえ直すならば、明治中期の思想のダイナミックな展望が開かれるのではないか。政教社の変貌について述べる際にも、「書生社会の趨勢と対応している」などの指摘はあるものの、おおむね大同団結運動など政治の動きとシンクロさせてそれを解説する作業が中心となり、「書生社会」の解体過程と無関係に進められているのは物足りない。

「書生社会」は、東京大学を「頂点」としながらも、慶應義塾、同志社など多くの私立学校に学ぶ青年、さらには、地方において『○学校講義録』の類を購読する青年もふくめて、明治中期の若々しい社会を支えたエネルギーの源泉であった。それは、幕末の「処士横議、処士横行」の零田気のもとに生まれた「朋友ネットワーク」(西周が脱藩して無一物で手塚律蔵の塾に転がり込んだとき彼を支えたのは大坂の後藤松蔭塾の学友松岡隣であった)に遠く端を発し、やがて、明治憲法体制の確立とともに解体していく。「書生社会」

は、この時期、たしかに、思想、文学、宗教、言論など、多方面において自らのオピニオン・リーダーを生みだし、それを支えたのである。政教社や民友社を支えたのはこの層であり、この層の解体とともに「国粹主義」や「平民主義」は急速にその思想の抽象化を深めていったのではないか。このような視座に立つとき、明治中期のさまざまな思想の動きが一つの展望のもとに把握されるのではないか。このような構想を沸き立たせてくれるほどに、中野目氏の著書は刺激的であり、創造的であるということであろう。

(愛知教育大学教授)